

“山に逃げろ”となぜ言えた？

―東日本大震災直後の気仙小学校校長の状況判断と意思決定の背景を探る

野 中 健 一
菅 野 祥 一 郎

一、はじめに

陸前高田市立気仙小学校（同市気仙町）は、広田湾に注ぐ気仙川河口より一キロほど内陸で川沿いの防潮堤より二〇〇mほど離れた標高一〇mほどに位置していた（図1）。二〇一一年三月一日の東北地方太平洋沖大地震により発生した津波は気仙川を遡り、三階建て校舎の最上階まで飲み込まれた。しかし、当時九二名の在校児童全員と校庭に避難していた住民ら一五〇〜二〇〇名は、津波襲来直前に、校長の采配により、学校西側に隣接する山に登って避難し難を逃れることができた。この避難は「奇跡の生還」としても紹介されている（上田二〇一一）。当時

校長だった菅野は当時の様子と行動を著している（菅野二〇一一a、二〇一一b）。

「恐ろしい光景を目にしたのは高台に登り、一息ついた時のことだった。轟音とともに茶色の水の壁、どこから来たのか大きな屋根が目の前に現れた。そしてその水は瞬間に校舎にぶつかり、三階まで達し、そして逃げ遅れた人を飲み込んだ。さらに高台に上がったはずの私たちの足元にまで達した。」（菅野二〇一一b）

危機的状況をなぜかわすことができたのか、これがどうしてできたのだろうか？

「車のラジオからの「大津波」の言葉を聞き、ふと我に返った。このままではいけない、逃げなければ…。「山に

「山に逃げろ」となぜ言えた？（野中・菅野）



図1. 気仙小学校および関連施設の位置

登れ！」思わず叫んでいた。」（菅野、二〇一二a）

「私は六〇年間で学んだ判断する力、決断する力、指導する力、全ての力をその一瞬に使ったような気がしている。山に登ることを決断した。」（菅野、二〇一二b）

「子どもたちを助けたいと思うのはどこも同じだと思う。元気に登校した子どもは元気に、そして無事に帰すのが原則だから。あえて言えば、本校は近くに山があったので私の頭の中にインプットされており、そこに登ることの判断に迷うことはなかった。そして決断をする者、つまり私とその場にいた。さらにその指示を職員と近くにいた地域住民がしっかりと受け止めた。その違いだろうか。」（同）

「実際の場面になった時、誰がどのように責任を持った判断が出来るか。誰が先頭に立って指示をするか非常に難しい。しかし学校は組織で動いている。トップが周りの状況や意見を聞きながら適切かつ迅速な判断を下していかなければその集団は単なる鳥合の集となる。だからこそ職員は指示をしっかりと受け止め、それにしたがって行動しなければならぬ、それが組織としての動きではないかと思う。児童生徒の命を左右する場合はなおさらである。今さらながらそう思い、そう確信している。」（菅野、二〇一二b）

これらの述懐からは、当時の判断がいかに瞬間的なものであったのか、そして、その判断をするための背景が校長



写真1. 震災後の気仙小学校（2012.1.10撮影）

職だけでなく人生や地域と結びついていることがわかる。

当時同校の校長であった菅野（二〇一一年三月で定年退職）が行った講演に対して、野中がさらに詳しく話を聞き、そのやりとりから、これは偶然的な奇跡ではなく、津波予測にともない想定された行程に基づく避難でもなく、菅野自身の状況判断の積み重ねとそれを可能たらしめたライフヒストリーの反映によるものであったことがわかった。

この小稿では、両者のやりとりによって上記の結果に至るまでの各所での状況判断と意思決定とそれにいたった経緯を明らかにする。その意思決定を文化環境学的に分析することにより、今後の震災に備えるための日常生活の構築備えと環境整備への一助としたい。

方法は、菅野の講演とインタビュー、エッセイの参照、野中と菅野との質疑応答により作成した記録を用いる。

二、当事者の経験を語る

菅野は、二〇一二年六月一日に野中の息子の通う愛知県春日井市立岩成台小学校で「学校を、子どもたちを守るために」三、一・その時を、その直後を、語る」講演をおこなった。この経緯は後に述べることで、児童・保護者を対象とした講演は以下のような内容であった。

「山に逃げる」となぜ言えた？（野中・菅野）

出張で学校を出ている最中に地震に遭った。これは一大事と戻ろうとしたが、町中と小学校を結ぶ通常ルートの橋は交通規制による車の渋滞のため渡れず、上流の橋を渡って、学校に到着した。すると全校生徒、教師、校区の避難住民が運動場に整列していた。ここは危険だと判断して、学校に隣接する山を登らせたその直後に大津波が襲来した。避難できた児童全員は難を逃れることができた。この経緯の説明とともに逃げるときの状況や当時の児童の声を紹介した。

この発表を聴いて、野中は、なぜ、避難所からさらに、しかも指定避難場所ではない西側の山に逃げることでできたのか？また、なぜ、校長が到着するまでだれもさらに避難しようとしなかったのか、それらの理由を知りたかった。なぜならばこの講演会に先立って現場を見てきた野中には、あえてたいへんな方向に逃げ場を選ぶというのは容易なことではなかったと感じたからである。未知の出来事に直面した場合の行動のための意思決定とその判断の材料となる環境や状況をどのように認識していたのか、そして、それをどう生かしたのか、自分の専門とする地理学・文化環境学的思考・方法・知識を災害に生かすために理解したかったからである。

そこで講演会後に菅野より当日の行動についてさらに詳

しく話を聴いた。

校外に出張していた菅野は、地震のすさまじさから小学校へ戻ろうとしたものの、通常ルートで気仙川を渡る市街地から通じている姉齒橋は通行止めとなっており、その手前で渋滞に巻き込まれた。そこで上流に架かる詠石橋なら渡れるのではないかと判断し、そちらに向かうことにした。自分の車は渋滞列の前から二番目に位置していたので、列から抜け出してかわすことができ、川沿いの土手に沿って走ることができた。詠石橋はすれ違いのできない狭い道だったが幸い対向車が来ず渡ることができた。

車で小学校に駆けつけたのは、地震発生後三〇分ほど経過した頃だった。校庭に全員が整列しており、その真正面に自分が立つことになった。児童たちは校舎と山を背（正確には山を右後方にして）にして並んでおり、その前に自分が立ったので左前方に山が視界に入った。校庭では、教員や住民がこの先避難をどうするか迷っていた。

小学校が一次避難所なので、ここにいれば良い、校舎に避難しよう、もっと高いところに避難しようなどと意見が出ていたと思われるが、第一避難所である小学校に避難したことでひとまず安心していたようであった。

しかし菅野は、カーラジオから聞こえた「大津波」情報に大きな津波の来ることを危惧し、高いところへ逃げるこ



写真2. アスレチック階段 (2013.9.15 撮影)

とを考えた。西側の山（通称わんぱく山）に登るには道はないが、アスレチックのコースで木製の梯子段（アスレチック階段）のあることを知っていた。また、車で駆けつけたときに、その入り口近くだったのでそれに気づいた。

校庭より一〇〇mほど離れた山にその施設を使って避難

史苑（第七四巻第二号）

- ②校区の土地勘を持ち、学校へ戻るためのオルタナティブな選択肢をとることができたこと
- ③大津波襲来を予測したこと
- ④山に近く、全員を前にして菅野が位置して指揮することができたこと

することを決断し、菅野は避難の号令をかけた。ただし、山を登る際、低学年から先に行かせては時間を要し、あとがつかえてしまい全体の避難に時間を要してしまうことが危惧されたので、高学年から先に行かせた。そうすればスピーディーになり、あとは大人たちが手助けしながら続くだろうと判断した。そして、さらに竹藪を拓いて林道へと抜けて二〜三時間歩き、児童を隣の月山神社と長圓寺に避難させた。この話からは、以下の点を特徴として避難することができたと考えられた。

①校長として菅野がいたこと

「山に逃げる」となぜ言えた？（野中・菅野）

三、宴席の話題から背景の理解へ

インタビュアーから明らかにになったことは、行動の結果であった。それが「なぜ」できたのかはその時点ではわからなかった。講演会夜は、野中も懇親会に参加し、菅野と隣り合って座った。お互い当日が初対面であったが、野中が立教大学教員であることから、菅野の息子が立教大学を卒業し、埼玉県で教員をしていることが話題となった。このようなプライベートな話題から、ちようど野中も息子が大学進学のため上京することになり、東京の大学へ地方から送り出すことの困難さを身に染みていたため、立教大学へ出されたことでさらに話が盛り上がった。そして、菅野も東京の大学（法政大学）を卒業したことを語った。年齢を鑑みて当時にして上京できたことをさらに感心すると、自分には外に出たかったこと、当初は教員志望ではなかったことにも言及し、経歴へと話が広がった。当時下宿していた長屋が高度経済成長下で高速道路建設のため取り壊されることになり、あと一年住めば立ち退き金を得られることがわかり、これでもう一年間の勉強できると考え、教職単位取得を行ったこと、当時の学生生活から帰郷して市役所勤めになったものの自分の性分に合わなかったので真剣に教員をめざそうとあらためて勉強し直し教員になった経緯が

語られた。野中は、その人生に感動しながらも、この宴席の話題の中に、①の菅野が気仙小学校に校長としていた理由、そして山へ避難することができた理由があるのだと感じた。すなわち、ライフヒストリーが、当日の意思決定になつたのではないかと思いついたのである。そこで、この宴席での話題を思いだせる限りでまとめ、後日菅野に送り、それを修正し、整理することができた。

菅野は、法学部を卒業後教員養成課程を一年経て、陸前高田市役所勤務となったが、一九七五（昭和五〇）年に教師となった。最初の赴任校が気仙小学校だった。その後転任を経て再び気仙小学校へ赴任した。自転車競技を面白いと思い、ロードレースに参加するようになった。陸前高田を会場とした「南三陸サイクルロードレース」には毎年連続参加し、気仙町住民や同校保護者らから幟旗を上げて沿道で応援を受けたのがうれしかった。そして、一九八九（平成元）年に同校の校舎大規模改修があり、その記念事業に地域の寄付金でアスレチック施設が西側の山に作られた時は同校勤務であった。その後校長職に就き、通例では最終赴任時には自分の地元校とするところを、当時の応援への感謝の気持ちで気仙小学校を志願した。そして震災に遭遇した。アスレチック階段を上って避難するまでにはこのような経緯があったことがこの話からわかり、今回の避難が

準備された故のものでもなく、その場の判断とそれを実現させた「運命」そして、それを作ってきたさまざまな縁のあることを知ることができた。

小学校へたどり着けた要となった詠石橋は、すれ違いできない狭い橋で朝は一方通行になるので、通常は利用していなかったが、自宅からは一〇キロほどの道のりをいつも自転車通勤しており、その途中に見える橋であったので存在は知っていた。

また、学区は校舎を中心に半径二キロの圏内にほぼ収まる程度であり、校区をよく回っており、三度目の赴任なので地域住民とも馴染みができており、地域はよくわかっていた。

他の避難場所の選択については、かつて避難訓練を行ったことのある裏山の茶畑があったがそこまで逃げる時間がないと判断した。

四、フィールドワークがご縁になる

菅野と野中が知り合ったのは、野中が陸前高田を二〇一二年一月に訪問したことがきっかけである。陸前高田を訪問したのは、野中の研究プロジェクトの共同研究者であるお茶の水女子大学熊谷圭知教授の紹介によるもので

ある。野中は震災後、知人の住む岩手県大槌町を訪問し協力していた。復興協力が話題となったとき、熊谷氏の父方の実家が陸前高田出身であったことから避難住宅にコミュニティ・カフェを設けた話を聞いていた。いっぽう、講演会が開催された春日井市立岩成台小学校では、二〇一一年度に学区の「安心安全マップ・お宝マップ作り」を実施し、そこで教頭堀部要子氏と知り合った。これは以前に作成した地図の改訂方法の研究の一環で、実施に積極的に協力いただいた。前回は安心安全マップだけであったが、今回は地域への親しみも入れようと「お宝マップ」も作成しようとなつた。その過程で児童のあげたお宝場所のいくつかは、学校の判断により危険を伴うためお宝マップから削除しようとした。野中は、児童の意見も聞いた上で判断したいと申し出たが、その機会をもつならば、実際に地図の現地確認もあわせて授業をもとくと提案された。議論を交わしていく中で、堀部氏が二〇一一年秋に東北地方へ震災視察に出かけたことを伺った。その時はレンタカーで被災地を通り過ぎて見てきただけということだったので、自分の大槌町での協力などを話したところ、ぜひ現地へ同行して作業に参加したり現地の人から話を聞きたいと申し出を受け、都合のつく一月七〜九日を予定した。しかし大槌では日程の都合が合わず、陸前高田のコミュニ

「山に逃げる」となぜ言えた？（野中・菅野）

ティ・カフェで手伝いながら話を聞く方向で企画した。そこで精力的に活動されている佐藤一男氏が漁師であることから、野中の専門を生かした協力も可能ではないかと考えた。しかし、現地に到着してからこの訪問日程では、連休のためコミュニケーション・カフェは開業しないことがわかった。そのためカフェでボランティアする計画ができなくなり、かわりに話を聞ける人を探すことに変更した。震災の影響を勘案して、むやみに訪問することは憚られ、熊谷教授より紹介いただいた方および佐藤氏から紹介を受けた方より話を伺うことにした。堀部教頭は教育関係の話も聞きたいと言うことで、学校関連の被災箇所を回り、またその関係者も紹介してもらおうようにした。

その行程で、気仙小学校のコンクリート建て校舎三階最上階まで津波が襲い、隣接する体育館も浸水した上に火災にも見舞われた惨状を目の当たりにした。周辺集落もかなり水に浸かった様相だった。児童の安否はどうだったのか疑問をもち、翌日会わせていただいた菅野進氏から、全員山の上に逃げて助かったという話を伺った。当時の校長（本稿著者の菅野祥一郎）が知り合いだということで紹介いただき、電話番号を教えてもらうことができた。残念ながら菅野は当日不在（埼玉の訪問）のため会うことができなかった。しかし、危機的な状況下で氏の判断により全員避難

させることができたことは、今後の小学校危機管理でも重要なことだと堀部教頭が判断し、詳しく話を聞きたいと後日連絡を取り、三月に再訪して話を聞くことができた。そして菅野校長の経験を勤務校にもぜひ伝えたいと岩成台小学校で講演をしてもらうことにこぎつけた。

講演会当日は、野中が海外出張からの帰国後会場に駆けつけるため、講演を半分しか聞けないことや地理学的な見地から学校周辺の環境との関係について話を聴きたいと思いい、午後の行程までの間に主催の小学校および堀部氏に懇談の時間をとってもらおうよう依頼した。その懇談によって、裏山に避難できた行動がわかった。そしてその後の懇親会での宴席での話題から、個々の行動の意思決定の理由を整理することによって菅野のライフヒストリーと小学校での活動とが結びつき、避難のプロセスが明らかとなった。

五、人と場所の結びつき

行動は偶然だけでは作れないことであり、何らかの意思決定によつて可能となる。その状況とそれを判断する力を知ることが今後のために必要となる。けっして「奇跡」や「本能」で片付けられるものではない。今回、避難をなし得たことは、人生の個々の出来事の綿密な積み重ねがつながっ

てできたことだといえる。それは、結果的には「運命」といえるものかもしれない。個人ではさまざまな危険性や可能性を勘案して次の行動判断をしても、集団でいることにより、それ故の規制が働き、個人の判断による状況に依じた行動がとりにくくなるからである。今回の結果には現場で状況判断に直面した集団において、校長という責任者による号令で集団が動いたことは、その体制づくりの意味も検討できるであろう。しかし、現場での状況判断において校長自らの経験と知識の裏打ちがあつて可能になつた点について注目したい。これは個人の意思に加えて、さらにそれを可能としたアスレチック施設の存在、校長が環境を認識し行動を指示できる位置に立つたこと、その場に菅野氏がいたこと、これらは「縁」のつながりによるものだといえる。「縁」を作るのは、その時の当人が与えられた機会とその判断による。つなぐにせよ拒否するにせよ主体的・能動的な働きかけが必要である。そして、つながることにおいて、必要なのは「共感」であろう。これは当人の「生き方」にも結びつく。ここでは平常時における「楽しい」こととそれに対する「恩」の連鎖が浮かび上がってくる。その経験と蓄積が緊急時における状況の把握、判断、行動に大きく働いたといえる。

物事はその瞬間の意思決定の積み重ねとそれに応じた行

動の連続から成り立っている。しかし、それらを動かすのは、そこに至るまでの自らの経験と感情の積み重ねによって成り立っている。

私的な経験や感情からなる背景は、起こつた事実を聞いただけではなかなかわからない。単なる仮説を説明していく作業でもわからないことである。話者と聞き手との交流や共感を経て、共通の問題に対して、なぜだろう？ どうしてできたのだろうか？ と共に問いかけ、共に理由を探っていくことからその理由が浮かび上がってくる。「なぜ」を問いかけるためには、ある出来事が成り立つ理由に迫らなければならぬ。それは、他人事ではなく、現場にたつて状況を想起し、自分ならば何が出来たのであろうかという自らへの問いかけと、それをなした人への尊敬にあるであろう。その念が双方の出会いを作りだし、話を聴く場、そして話題の展開へとつながる。それが「縁」となり、会話の根底にある経験の共感によって分かり得たことであつた。

震災から三年がたつ現在、被災した人たちが様々な生き方に接し、必死で立ち上がろうとする中で、当時のことを話し、何かを伝え残そうとしている機運が感じられる。経験の語りを人生として再構成する方法は、ライフストーリーでないしはライフストーリーの方法論として構築されていく(谷一九九六、桜井二〇一二など)。本稿で主題とした

「山に逃げる」となぜ言えた？（野中・菅野）

地理学でもその方法は地域を解明するために有用である（湯澤二〇〇七）。人生の経験を問う語りプロセスにおいて、地理学・文化環境学がとらえる地域を構成し社会や人々の生活に結びつく環境条件との関係や人の能動的・自律的なあるいは制約を受ける時空間行動から理解しようとする（林・野中二〇〇三）によって、個人の当時のなしかた行動の要因、そして今在ることの理由を明確にし、自ら再認識し、定位することが可能であろう。

災難を話題とすると、必死の思いで命からがら逃げ出したこと、不幸に見舞われた人々のことを鑑みれば、過去の幸運な感覚を強調することは不謹慎きわまりないととられるかもしれない。しかし、力を発揮できる人の強さ、できたという結果を他人が知ることは、知識と行動を次の世代へつなぐことや、広めることになり、将来への備えとなる。出来事を自らが客観的にとらえることができるようになるには、過去の経験の逡巡に至るまでの時間の経過も必要であろう。それと同時に客観的に引き出すための外部の力も必要である。これが共感による「縁」となって、個々の内にあつた行動要因や背景が浮かび上がる。そして、何がキーになるかが明らかになって、将来に生かされていくことになることを願う。

（本学文学部教授／陸前高田市立図書館長）

参考文献

- 上部一馬『奇跡の生還』コスモ二一、二〇一一年。
菅野祥一郎「健気な子供たちへ」『市女協だより』津波体験特集第二号、三六―三七頁、陸前高田市地域女性団体協議会、二〇一二年。
菅野祥一郎「戻らなければ 逃がさなければ」『艦衆』第五号、二二―二四頁、岩手県公立学校退職校長会気仙会、二〇一二年。
桜井厚『ライフストーリー論』弘文堂、二〇一二年。
谷富夫『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、一九九六年。
朴恵淑・野中健一『環境地理学の視座―〈自然と人間〉関係学をめざして』昭和堂、二〇〇三年。
湯澤則子「ライフヒストリーによる地域調査―「語り＋α」から暮らしを分析する」梶田真・仁平尊明・加藤政洋編『地域調査ことはじめ―あるく・みる・かく』ナカニシヤ出版、二二六―一三六頁、二〇〇七年。